

ムザッファル朝における支配の正統性

—Mubārīz al-Dīn Muḥammad 治世の政策の変遷—

杉 山 雅 樹

【要約】 イル・ハーン朝末期、ヤズドの支配権を授与されたムザッファル朝の創始者 Mubārīz al-Dīn Muḥammad は、Abu Sa'īd 死後の混乱期において、ヤズドの有力者であるニザーム家に関わる人々を経済的保護によって優遇し、ケルマーン地方進出以降には、ウラマーの側も積極的に王朝の支配を支持する姿勢をとるようになる。こうして Mubārīz al-Dīn は徐々に支配に対する都市住民の支持を獲得したが、シーラーズ征服後、さらなる遠征を前にして、新たに支配領域に組み込んだファールス地方に対し、これまで以上に支配者としての立場を明確にする必要に迫られた。このため、カイロのアッバース朝カリフに対するバイアを行い、その後世俗権力者「スルタン」としての地位とカリフの持つ宗教的権限をも主張するようになった。こうした支配者としての権威の変遷は、モンゴルの影響が急速に薄れていくイランにおいて、新たな君主像が生まれつつあったことを示しているといえよう。

史林 八九卷五号 二〇〇六年九月

はじめに

従来、一三世紀のモンゴルの襲来からサファヴィー朝の成立する一六世紀初頭まではイラン史における政治的・宗教的大変動の時代と捉えられている^①。その要因として、特に一二五八年 Hég. 率いるモンゴル軍の襲来によってアッバース朝が崩壊し、理論的にはイスラーム共同体の指導者の立場にあったカリフ位が消滅したことが挙げられよう。それ以前、

アッバース朝後期において権力を握った支配者、例えばセルジューク朝の Tughril Beg (在位一〇三八―一〇六三) は、宗教的権威であるカリフからスンナ派における世俗権力者を示す「スルタン」の称号を承認され、^② 政治的権限を委ねられるという形式をとった。その背景には、アッバース朝期にウラマーによってシャリーアの体系に組み入れられたカリフ権神授の理論があり、スルタンはカリフの承認によって自身の支配に対する正統性を保証されたのである。^③

しかし、シャリーアの規定とは関わりのない「不信心者」であるモンゴルがイスラーム社会を支配したことによって、イランにおける支配者の概念に Chingiz Khan の血統という新たな要素がもたらされることとなった。^④ やがて、イル・ハーン朝 Ghazan (在位一二九五―一三〇四) は、既にムスリムとなっていたモンゴル軍の支持を得るために自らイスラームに改宗し、「イスラームの帝王 (padshah-i Islam)」の称号を用いてアッバース朝カリフ消滅後のイスラーム世界における信仰の保護者として振舞ったが、^⑤ 一方では引き続きモンゴルの伝統を遵守し、都市の有力者に対しても自らが Chingiz Khan の子孫であることを強調した。^⑥ つまり、Ghazan 以降、支配者にとって「イスラームの帝王」であることと Chingiz 家の後裔であることの二つが、支配の正統性を主張する根拠となりえたと考えられるのである。^⑦

その後、一三三五年 Abu Sa'īd (在位一三二六―一三三五) の死によってイル・ハーン朝が事実上崩壊すると、モンゴル系有力アミール達は Chingiz 家の血筋を持つ人物をハーンとして擁立し、覇権を争った。^⑧ イル・ハーン朝下で成立した非トルコ・モンゴル系の地方政権は、当初こうした傀儡ハーンのうちいずれかの権威を認め、ハーンの名において金曜礼拝の説教 (フトバ Khutba) を読み、貨幣の鑄造 (スイッカ sikka) を行っていたが、一三三九―一四〇年以降、徐々にモンゴルの宗主権から脱していく者が現われた。^⑨

では、こうした「イラン系」地方政権はどのようにして自身の支配権を確立することができたのであろうか。この問いに対し、彼らが、モンゴル時代以降民衆の間で深い崇敬の対象となっていたスーフィーやサイイドとの関わりを深めることによって、支配の正統性を獲得したことが既に指摘されている。^⑩ しかしながら、この時期における地方政権の支配の在

り方を明らかにするためには、さらに多くの事例を提示する必要がある。そこで、本稿では当時の地方政権の一つ、イラン中南部を拠点としたムザッファル朝を採り上げ、考察を進めたい。

イル・ハーン朝末期にヤズドで成立したムザッファル朝の創始者 Mubarriz al-Din Muhammad (在位一二一八―一三五八) は、Abu Sa'id の死後、傀儡ハーンを擁立するチョバン朝との同盟を通じてケルマーン地方を獲得し、その後インジュール朝^⑪君主 Abu Ishaq Inju (在位一二三三―一二五七) との抗争の末にシーラーズ、イスファハーンを征服することに成功した。さらにタブリーズをも一時占領したが、その直後、息子 Shah Shuja' (在位一二五八―一二八四) が皇子たちのクーデターによって廃位に追い込まれた。君主となった Shah Shuja' は親族間の内紛を治め、治世後半にはムザッファル朝の最大領域を獲得することになるが、彼の死後一二九三年 Timur (在位一二七〇―一四〇五) の侵攻によって王朝は崩壊に至る。

ところで、従来のムザッファル朝に関する研究では、王朝の支配が確立される背景となった諸要因については十分な考察がなされないままであった。^⑫ こうした中で、Album は Mubarriz al-Din 時代の貨幣に刻まれた支配者の名前の変遷に注目し、Mubarriz al-Din が傀儡ハーンの宗主権を認める立場から、やがて独自の権威を獲得するに至る過程を明らかにした。^⑬ しかし、Album にしても貨幣に刻まれた銘文の変遷を年代記史料の記述と整合し、かろうじて時系列的に並べただけに留まり、Mubarriz al-Din が主張した支配の正統性について具体的な考察はなされていない。さらに、Album が Mubarriz al-Din の権威が確立された重要な政策と位置付ける、カイロのアッバース朝カリフに対するバイアの意図とその後の影響についても十分に検討されているとは言えない。

本稿は、イル・ハーン朝崩壊後、Mubarriz al-Din がモンゴルの宗主権から脱していく過程において、どのようにして支配の正統性を獲得したのかを明らかにすることを目的とする。そこで、Mubarriz al-Din の治世を、イル・ハーン朝宗主権下でヤズドの支配権を獲得した台頭期(一二三三年)、Abu Sa'id 死後ケルマーン地方に進出し、インジュール朝との

抗争に勝利してシーラーズ征服に成功するまでの拡大期(一二三三―一二三五年)、その後さらにイスファハーンを征服し、タブリーズにまで進出した全盛期(一二三三―一二三八年)に分け、時代順に Mubarriz al-Dīn の政策の転換を確認していきたい。第一章は台頭期におけるムザッファル朝の立場を明らかにするため、王朝の出自とヤズドにおける政権の成立過程を考察する。第二章では、王朝の拡大期におけるムザッファル朝と都市の有力者との関係を検証し、都市の有力者が Mubarriz al-Dīn の政策において果たした役割を明らかにする。第三章では、ファールス地方征服後 Mubarriz al-Dīn によって行われたカイロのアッバース朝カリフに対するバイアの意図とその後の王朝の権威に与えた影響について考察する。それによって、イル・ハーン朝下で成立した地方政権が、モンゴルの宗主権から脱した後、どのようにしてイスラーム社会を統治することができたのかについて一つの事例を示したいと考える。

尚、本稿で使用了主要史料の略称は以下の通りである。^⑩

- DhM : Ghiyath al-Dīn Faryumadī, *Diya'i Majma' al-Ansab*, in Muhammad b. 'Alī b. Muhammad Shabankarā'i, *Majma' al-Ansab*, ed. Mir Hashim Muḥaddath, Tehran, 1363s
- DW : Khwandamīr, *Dastar al-Wuzarā'*, ed. Sa'īd Naḥṣī, Tehran, 1976
- HS : Khwandamīr, *Ḥabīb al-Siyar fī Akhbār Afṛāq al-Bashar*, vol. 3, ed. Muhammad Dabir Siyāqī, Tehran, 1333
- IB : イブン・ハットゥータ著・家島彦一訳注『大旅行記』全八巻、東洋文庫、平凡社、一九九六―二〇〇二年
- JKh : *Jamī' al-Khayrāt*, in Afshar, I., *Yadgar-ha-yi Yazd*, vol. 2, Tehran, 1354s, pp. 391-558
- JM : Muhammad Muḥd Musawwif Baḡrī, *Jamī'i Muḥfīd*, vol. 3, ed. Iraj Afshar, Tehran, 1340s
- MF : Faṣṭh al-Dīn Khwaṭī, *Majma' al-Faṣṭh*, vol. 3, ed. Mahmud Farrukh, Mashhad, 1339s
- MI : Mu'tā al-Dīn Yazdī, *Mawāhib-i Ilahī*,^⑪

/ms: British Library Ms. Add. 7632

/txt: mujallad 1 only, ed. Sa'īd Nafīsī, Tehran, 1326s

MS: 'Abd al-Razzāq Samargandī, *Maḥlā' al-Sa'diyya wa Majma' al-Bahrayn*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, Tehran, 1353s

MTM: Mu'īn al-Dīn Nafāzī, *Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu'īnī*, ed. J. Aubin, *Extraits du Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu'īnī (Anonymous d'Iskandar)*, Tehran, 1328s/1957

NQ: Ḥamd-allāh Mustawfī Qazvīnī, *Nuzhat al-Qulūb*, ed. G. Le Strange, Leyden and London, 1915

RS: Mirḥwānd, *Tārīkh-i Rawādat al-Safā*, vol. 4, Tehran, 1338s

ShN: Ibn Zarkub Shīrāzī, *Shīrāz-nāma*, ed. Ismā'īl Wā'iz-Jawādī, Tehran, 1350s

TAM: Mahmūd Kutbī, *Tārīkh-i Āl-i Muzaffar*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, Tehran, 1364s

TJY: Ahmād b. Ḥusayn b. 'Alī al-Karīb, *Tārīkh-i Jadīd Yazd*, ed. 'Irāj Afshar, Tehran, 1345s

TShU: Abu Bakr al-Qubīr al-Ahī, *Tārīkh-i Shaikh Uwais (History of Shaikh Uwais)*, *An Important Source for the History of Adharbāijān in the Fourteenth Century*, ed. and tr. J.B. van Loon, The Hague, 1954

TY: Ja'far b. Muḥammad b. 'Alī al-Ḥasan Ja'fārī, *Tārīkh-i Yazd*, ed. 'Irāj Afshar, Tehran, 1338s

- ① 本稿で述べる「イラン」は、イル・ハーン朝領土であった「イラン・ギシーン」「すなわち現在のイラン・イラク・アゼルバイジャン・アフガニスタン・中央アジアの一部を含む広義のイランを指す。
- ② Toghrit Beg 以前にも「スルタン」を名乗った例として、固有名詞として用いたカリフやフワイフ朝アミール、「支配者」の意味で自称したガズナ朝の君主の例が挙げられるが、公式に称号として用いたのは Toghrit Beg が初めてであった[清水宏祐「セルジューク朝のスルタンたち——その支配の性格をめぐって——」杉勇・前嶋信次他
- 編『オリエンタル講座五——スルタンの時代』学生社(一九八六)一〇頁; "SULTAN", *EL2*。なお、本稿においては、支配者が被支配者に対して自身の統治を積極的に肯定させ得る根拠となる要素として「支配の正統性」という用語を用いる。
- ③ 佐藤次高「イスラームの国家と王権」岩波書店(二〇〇四)三三—三九、四五—四八、一〇六—一〇八頁; "KHALIFA", *EL2*。
- ④ Lambton, A.K.S., "Concepts of Authority in Persia: Eleventh to Nineteenth Centuries A.D.", *Iran*, 26, 1988, pp. 99-100.

- ⑨ Melville, C., "Padshah-i Islam: The Conversion of Sultan Mahmud Ghazan Khan", *Pembroke Papers 1: Persian and Islamic Studies in Honour of P.W. Avery*, Cambridge, 1990.
- ⑩ Ghazan はイスラーム改宗後も、シリア遠征の際にダマスカスの有力者の前々 Chingiz Khan に至る自身の系譜を誇らしげに述べたとする [Amīnī-Preis, R., "Mongol Imperial Ideology and the Ilkhanid War against the Mamluks", *The Mongol Empire and its Legacy*, Leiden, 1999, p. 68]。Ghazan のハンナの尊厳に対する執着は、同じく idem., "Ghazan, Islam and Mongol Tradition: a view from the Mamluk Sultanate", *BSOAS*, 59-1, 1996 を参照のこと。
- ⑪ 安藤忠朗「トルコ系諸王朝の国制とイスティーム」堀川徹編『世界に広がるイスラーム』(講座イスラーム世界三) 栄光教育文化研究社 (一九九五) 一五五—一五六頁。
- ⑫ Abu Sa'īd 死後の有力アミールや各地方政権の動向については Boyle, J.A., "Dynastic and Political History of the Il-Khans", *The Cambridge History of Iran*, vol. 5, Cambridge, 1968, pp. 413-416; Iqbal, 'A., *Tarikh-i Mughul*, Tehran, 1941s, pp. 365-478; Roemer, H.R., "The Jalayrids, Muzaffarids and Sarbadars", *The Cambridge History of Iran*, vol. 6, Cambridge, 1986 を参照のこと。傀儡ハーンを擁立して覇権を争った有力アミールのうち、ジャライル部族を率いる Shaykh Hasan Buzurg とスルドス部族を率いる Shaykh Hasan Kachik に代って樹立された地方政権であるジャライル朝とチョバン朝については以下の專論がある [Bayani, Sh., *Tarikh-i Aḡ-i Jalayir*, Tehran, 1345s; Nabī'i, A.F., *Tarikh-i Aḡ-i Chupan*, Tehran, 1352s]。
- ⑬ イスラーム世界における支配者の権利として、自身の名におつてトバを読ませることで、貨幣に自身の名を刻むことが挙げられる。逆にフトバや貨幣から支配者の名を削除するのでは、その支配者の統治権を否定するのを意味した。Abu Sa'īd の死後、各地方政権下では傀儡ハーンの名前で貨幣が鑄造されていたが、一三三九—一四〇年インジナー朝の Mas'ūd Shah 治下のシーラーズで鑄造された貨幣を始めとして、各地で支配者の名前がない貨幣が鑄造されるようになった [Album, S., "Power and Legitimacy: The Coinage of Muḥarriz al-Dīn Muhammad ibn al-Muzaffar at Yazd and Kirman", *Le Monde Iranien et l'Islam*, 2, 1974, p. 158; idem., "Studies in Ilkhanid History and Numismatics: 1. A Late Ilkhanid Hoard (743/1342)", *Studia Iranica*, 13-1, 1984, pp. 114-115; Smith Jr., J.M., *The History of the Sarbadar Dynasty, 1386-1381 A.D. and its Sources*, The Hague-Paris, 1970, pp. 71-72, 201-204]。
- ⑭ かつて「イラン系」地方政権に関する代表的な研究としては、過激なマフディー思想を持つスーフィー教団と結びつたサルバダール政権 [Aubin, J., "La fin de l'État Sarbadar du Khorassan", *Jd*, 262, 1974; Smith 1970]、サイイド家系出身のダルウイシムとマラーブが政治権力を獲得したマルアシー政権とキヤー政権 [後藤裕加子「カスプ海沿岸の二つのサイイド政権の成立——西暦十四、十五世紀のイラン社会と民俗イスラーム——」『史学雑誌』一〇八—九 (一九九九)] などが挙げられる。また、ヘラートのクルト朝は在地のスーフィーと血縁関係を結んでいたが、統治の基盤はグルールの連帯意識に支えられていた [本田実信「ヘラートのクルト政権」『モンゴル時代史研究』、東京大学出版会 (一九九九) ; Potter, L.G., *The Kart Dynasty of Herat: Religion and Politics in Medieval Iran*, Ph.D. Dissertation, Columbia University, 1992]。
- ⑮ 同時代史料によれば、インジナー家はスーフィー 'Abd-allāh Ansārī に繋がる血統を持つ [Shāh, 101; Ḥamd-allāh Mustawfī Qazwīnī, *Tarikh-i Guzda*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'i, Tehran,

1362s: 664]。一三〇四年王朝の創始者 Mahmud Shah Inju は Öjeytu からファールス地方のハーキム職を委ねられた [SNF: 101]。彼は、息子達を現地に派遣して実務を委ね、自身はオルドに留まり權力を握ったが、Abu Sa'id の死後一三三六年 Arpa Ke'ün により殺害された [Ghani, Q., *Bahā dar Akhar wa Akhar wa Ahwāl-i Hafiz*, vol. 1, "Tarikh-i 'Asr-i Hafiz", Tehran, 1321s, pp. 7-8; Limbert, J.W., *Shiraz in the Age of Hafiz*, Washington Univ. Press, 2004, pp. 26-27; "Injū", EI2]。彼の子供達は、兄弟間じつまたムザッファル朝を始めとする周辺の地方政権との間じつ中南部の覇権を争った。なお、インジュ朝によるファールス地方支配については、渡部良子「イルハン朝の地方行政——ファールス地方行政を事例として——」『日本中東学会年報』二二(一九九三)二〇一—二〇三頁を参ぎになる。

⑫ 従来のムザッファル朝研究の傾向は次の二つに大別されよう。まず Hafiz に代表されるシーラーズの詩人の作品の中で触れられる内容から王朝や支配者の性格を考察したものの [Brown, E.G., *A History of Persian Literature*, 3, *The Tartar Dominion (1265-1502)*, Cambridge, repr. 1964, pp. 277-278; Ghani 1321; Leecol, R., "Essai d'une Chronologie de l'Oeuvre de Hafiz", *Bulletin d'Études Orientales de l'Institut Français de Damas*, 10, 1944; Schimmel, A., "Hafiz and his Critics", *Studies in Islam*, 16, 1979]。二つ目は対外戦略や親族間の抗争や内争を概説 [Sutnda, H.Q., *Tarikh-i Ahi Muzaffar*, 2 vols., Tehran, 1346-7s (ズレ Sutnda vol. 1 及び vol. 2 は略記); "MUZAFFARIDS", EI2]。ムザッファル朝成立の要因に関じつ

Sutnda は「モンゴルの圧制に苦しめられていたイランの人々が Mubbariz al-Din の解放を与える旗の下に集まり、ムザッファル朝の創設を助けた」という非常に偏った見解を示している [Sutnda vol. 2, p. 166, 207]。

⑬ Album にあれば、Mubbariz al-Din 治世下のムザッファル朝領域内で鑄造された貨幣に刻まれた支配者の名前の変遷は以下の通りである(鑄造年の明らかなもののみ列記、括弧内は鑄造された都市名)。一三三八—九九年(ヤズド) Togha Temur' 一三四〇—一年(ヤズド、ケルマーン) Sulayman Khan' 一三四七—八年(ヤズド) Abu Isḥāq Injū' 一三五—一二年(ケルマーン) 及び一三五四—五年(ケルマーン) 支配者の名前無し' 一三五六年(Kashan, Bazu) カイロのアッバース朝カリフと Mubbariz al-Din の名前 [Album 1974, pp. 161-168]。

⑭ ムザッファル朝に関する史料については、岩武昭男「ムバーリズツティーン・ムハンマドの廃位——ムザッファル朝の史料について——」『関学人文論叢』四七—三(一九九八)；Sutnda vol. 1, pp. 1-57 を参照された。

⑮ この書に関しては、これまで前半部分(写本の 120b まじ)しか校訂・出版されていなく。本稿では、校訂本の引用にじつは MF 後半部分の写本箇所からの引用にじつは MF 120s と記す。なお、写本に關しては、堀川徹先生の御好意により京都外国語大学所蔵の写本 no. 955.02-Mu1 (174715) を参照するじつがであった。記して感謝の意を表す。

第一章 イル・ハーン朝下のムザッファル朝

まず、イル・ハーン朝宗主権下におけるムザッファル朝の立場を明らかにするため、ヤズドの支配権獲得までの経緯を、王朝の出自や Mubariz al-Dīn の血筋と合わせて検討したい。

ムザッファル朝の祖先は、イスラームの征服の際ホラーサーン地方に移住し、後にモンゴルの侵攻時にヤズド近郊のメイボド^①に拠点を移したアラブ系一族であった [MT: 27-30]。彼らは代々ヤズドのアタバクに仕えていたが、王朝の名祖である Sharaf al-Dīn Muzaffar (一三二四年没) はアタバク Yusuf Shah と反目し、イル・ハーンのオルドに向った。こうして彼は Arghun (在位一二八四―一二九二) に仕えるようになり、「太刀持ち (tūduch)」として登用された [MT: 34-36]。

やがて Muzaffar は、イル・ハーンとなった Ghazan から「千人隊 (hazara) のアミール位」や様々な贈り物を下賜された [MT: 36]。Muzaffar はこの時 Ghazan から与えられた千人隊の中のアミールの娘と結婚し、一三〇一年この「トルコ人の妻 (khatun-i Turk)」から Mubariz al-Dīn が生まれたという [TAM: 32, 33]。しかし、同時代史料でありムザッファル朝の公式年代記である MT には、Mubariz al-Dīn の母に関する記述がない。このことは Mubariz al-Dīn の母方の血統が高貴なものではなく、王朝の権威という点で重視されなかったためと考えられる。

続く『Muzaffar va Öjeytü (在位一三〇四―一三二六) から「Ardestān から Kirmanshahān までの境域の諸道と、Abarguh, Harat, Marvast の諸道の監督権 (nukumat)」を与えられた [MT: 38]。MT では、本来「ハーキム職」を意味する nukumat という単語が使用されているが、諸道に対する「ハーキム職」というものは存在せず、モンゴル語で tughatal' ペルシャ語で rah-dar と呼ばれる諸道の管理を行う職務を授与されたと考えられる。tughatal' は主にイラン系定住民が担当するディーワーン系の官職の一つであり、その具体的な職務は街道を利用する商人達に対する遊牧民による略奪行為の防止に努め、道中の安全を維持することであった^③。この時 Muzaffar が管理の任務を与えられた諸道とはヤズ

第1表 Mubariz al-Dīn Muḥammad 治世年表

年	ムザッファル朝領内の出来事	周辺の出来事
1318	イル・ハーン Abū Sa'īd からヤズドのハーキム職を授与される→ムザッファル朝の始まり	イル・ハーン朝のワズィール Rashīd al-Dīn Faḡl-allāh 処刑される
1327		イル・ハーン朝の大アミール Choban, Malik Ghiyath al-Dīn (K) により殺害される
1328-9	Khān Qutluḡh と結婚	
1335		Abū Sa'īd 死去→イル・ハーン位を巡る混乱
1336		Mahmūd Shāh (I), イル・ハーンとなった Arpa Ke'ōn により処刑 'Alī Padshāh, Mūsā をハーンに擁立し, Arpa Ke'ōn を Jaghatu の戦いで破る→ Arpa Ke'ō とワズィール Ghiyath al-Dīn Muḥammad b. Rashīd al-Dīn を殺害 Shaykh Ḥasan Buzurg(J), Muḥammad をハーンに擁立→'Alī Padshāh を殺害し, タブリーズにて政權樹立 Togha Temūr, ホラーサーンのアミールによってハーンに擁立される
1337		サブザワールにてサルバダール政權樹立
1338		Mas'ūd Shāh (I), 弟 Kay-Khusraw からシーラーズの支配權奪う Shaykh Ḥasan Buzurg, Shaykh Ḥasan Kuchik (Ch) に敗れ, タブリーズから逃亡→Muḥammad 殺害される
1339		Shaykh Ḥasan Buzurg, Jāhān Temūr 擁立 Shaykh Ḥasan Kuchik, Sulaymān Khān 擁立
1340	シーラーズ遠征を行う Pīr Ḥusayn (Shaykh Ḥasan Kuchik の甥) に援軍→ケルマーン地方の支配權授与 ケルマーンのハーキム Qutb al-Dīn と対立 ケルマーン征服	Shaykh Ḥasan Kuchik, Ūmās の戦いで Shaykh Ḥasan Buzurg に勝利 Shaykh Ḥasan Buzurg バグダードに帰還→傀儡ハーンの Jāhān Temūr を廃位
1341		Abū Ishāq, Pīr Ḥusayn によりイスファハーンのハーキムに
1342		Malik Mu'izz al-Dīn がサーヴァにてサルバダール軍に勝利 Malik Ashraf (Shaykh Ḥasan Kuchik の弟) と Pīr Ḥusayn の争い→混乱の中 Abū Ishāq がシーラーズの支配權を確保するが, その地位を兄 Mas'ūd Shāh に譲る Pīr Ḥusayn, Shaykh Ḥasan Kuchik の命で死
1343	バム征服→ホルムズから税徴収 A'rab-i Fāladr の反乱鎮圧	Mas'ūd Shāh が暗殺され, シーラーズ市内で内戦→Abū Ishāq (I) 支配權握る

ムザッファル朝における支配の正統性（杉山）

		Shaykh Ḥasan Kuchik 死去
1344		Malik Ashraf (Ch), Anushirwān をハーンに擁立 Abū Ishāq, 自らの名でフトバとスィッカ →インジュ朝軍によるムザッファル朝領土への侵攻始まる
1347	Ṣaḥrā-yi Khawn で Ūghāniyān と Jurma'iyyān の反乱軍に敗れる Abū Ishāq と講和	Abū Ishāq, ムザッファル朝内の混乱をみてヤズド地方に侵攻→一時ヤズドを占領
1350-1		Abū Ishāq, 再びヤズド遠征→失敗 Amīr Qazaghan のヘラート侵攻, Malik Mu'izz al-Dīn を破る
1351-2	ケルマーンにマスジデ・ジャーミ建設 Panj Angusht でインジュ朝軍を破る	
1353	次男 Shah Shujā' を後継者に指名 シーラーズ遠征開始 包囲戦の最中, 長男 Shah Muẓaffar 病死 シーラーズ征服	Abū Ishāq, イスファハーンへ逃亡 サルバダール政権, Togha Temūr を殺害
1354-5	イスファハーン遠征開始→ファールス地方で親インジュ派の反乱相次ぐ カイロのアッバース朝カリフにバイア Shabankara の Malik Ardashīr の反乱鎮圧	
1356	大ロルのアタベク Nur al-Ward の反乱鎮圧 イスファハーン征服→Abū Ishāq 処刑	Shaykh Ḥasan Buzurg 死去 → Shaykh Uways (J) 即位
1357		金帳ハンの Jani Beg, タブリーズ遠征→ Malik Ashraf 殺害→Jani Beg, 息子の Birdi Beg をタブリーズに残しキプチャク草原に帰還 Jani Beg 死去, Birdi Beg 帰還 Akhr Juk タブリーズ占領
1358	ジャライル朝軍の撤退後, タブリーズ遠征 Akhr Juk の軍を破りタブリーズ征服 ジャライル朝軍のタブリーズ進軍の報を受け, 撤退→イスファハーンにて Shah Shujā' ら皇子達のクーデターにより廃位	Shaykh Uways, 一時タブリーズ占領 Shaykh Uways 再びタブリーズ占領

地方政権の君主には、名前の後ろに（ ）で其々の王朝名を略語で示した（Ch=チョバン朝, I=インジュ朝, J=ジャライル朝, K=クルト朝）。

ド地方と周辺の大都市を結ぶ主要な街道にあたり、^④当時のヤズドという都市の経済的特徴を考慮に入れると、こうした諸道の管理は重要な任務であったことは明らかである。^⑤

やざド Muzaffar の活動はヤズドだけに留まらず、Ojeytu の命によって、反乱を起こした遊牧アラブ族の鎮圧のため Shabankara にも遠征する [MI: 41]。しかし、Muzaffar はこの遠征の最中 Shabankara の地で病に倒れ、一三一四年死去した [MI: 42; 74AM: 33]。

父の死後、四年間イル・ハーンの許で仕えた Mubariz al-Din は、ヤズド地方の諸道の監督権を受け継ぎメイボドに帰還した。やがて、インジュール朝の創始者 Mahmud Shah Inju の子 Kay-Khusraw (一三三八―九一年没) とヤズドのアタベク Hajji Shah との間で反目が生じた際、Kay-Khusraw の要請に応じて出撃し、Hajji Shah を破った。こうしてヤズドのアタベクは終焉を迎え、一三三八年 Mubariz al-Din は Abu Sa'ïd からヤズドのハーキム職を授与されたのである [MI: 53-58; 74AM: 35-36]。

この一連の記述の中で、当時の Mubariz al-Din とイル・ハーン朝の関係を鮮やかに反映する箇所がある。それは、Kay-Khusraw の援軍要請に対する Mubariz al-Din の返答である。

「壮麗さの持ち主 (sahib-shawkat) たる帝王が世界支配の王座において権力を有し、命令を行き渡らせる (nafidh-farman) ハーキムが統治の王座に定まっている今、あのお方の指示や賛同なくして争いの火を燃え上がらせることはできず、あのお方の従うべき命令なくして戦闘の境域に踏み入ることはできません」。 [MI: 56]

文脈上、引用文中の「帝王」と「ハーキム」は共にイル・ハーン、Abu Sa'ïd を指していると考えられる。つまり、Mubariz al-Din がヤズドで軍事行動を行うにあたって、イル・ハーンの権威を尊重し、宗主である Abu Sa'ïd の承認を最重視していたことが明らかとなるのである。

これまで述べてきたように、ムザッファール朝の祖先は一二世紀以降ヤズドに移住してきた家系であり、Mubariz al-Din

の父 Muzaffar はイル・ハーンとの個人的な繋がりを背景にヤズド地方の諸道の監督職を得ることに成功した。年代記や地方史の記述からは、Muzaffar と有力者を始めとするヤズドの都市住民との関わりはわずかな例を除いて確認することはできず、^⑥ムザッファル家とヤズドとを直接結ぶ要因は諸道の監督の遂行する軍事力だけであつたと想定できる。つまり、ムザッファル朝そのものは、イル・ハーンの権威の他にヤズドの支配に対して積極的な根拠を持ち得なかつたと考えられるのである。

① ヤズドの北西約二十 km に位置する町 [Krawulsky, D., *Iran-Das Reich der Ilkane*, Wiesbaden, 1978, pp. 284-285, karte 6]. *NQ* に於いて、ヤズド、Nāṣir, Nāṣir, Nāṣir と共にヤズド・ナシールを構成した三つの都市のうちのひとつであった [MQ: 74].

② Muzaffar が授けられた職名については史料間に相違がある。その他の史料では「yasaul (薩里奥) の rdaḥt (料理頭)」 [TAM: 31]、*「yasaul」* [FS: 274; MS: 158; RS: 448; Hatiz-i Abnā, *Jughrdi-yā-yi Hafiz Abnā*, vol. 2, ed. Sadiq Sajjadi, Tehran, 1999: 198] などとなっている。

③ Doerfer, G., *Türkische und mongolische Element im Neopersischen*, vol. 1, Wiesbaden, 1963, pp. 251-253. イル・ハーン朝後期の諸制度を継承したシヤール朝期の任命文書集 *Dastar al-Kutub* では、*tughan* (職は第二部第一門第二章「ワズールと遠大デマーワーンの長達への職務授与とその職務たるべき諸事について」に分類されている [Muhammad b. Hindushah Nakchabān, *Dastar al-Kutub fi Tārīḥ al-Marāṭiq*, vol. 2, ed. Ali-zade, A.A., Moscow, 1976: 165-169].

④ 当地 Kashan のヤズドに近い街道が存在し、Ardistan とその間に存在する [Krawulsky 1978, pp. 229-230, karte 6; Le Strange, G., *The Lands of the Eastern Caliphate*, Cambridge, 1905, pp. 207-208]. Kirmanshah とヤズド・ケルマーン地方を結ぶ街道上

にあり [Adamec, L.W., *Historical Gazetteer of Iran*, vol. 2, Verlagsgesellschaft, 1981, p. 412]. *NQ* に於いて、当時スルターニヤを発点とする幹線道路 (shahrah) の一つに Kashan を経由してイスファハーン、シーラーズへと南下する道があつた [MQ: 184]. つまり、Kashan を経由してスルターニヤとヤズド、ケルマーン地方を結ぶ道であり、そのうちムザッファルはヤズドを中心とした Ardistan-Kirmanshah 間の街道の監督権を任せられたのだと考えられる。また Abarqūh はヤズドとシーラーズを結ぶ街道上にあり [Le Strange 1905, p. 297]. Harat はシーラーズとケルマーン地方の Shirān を結ぶ三つの街道のうち、バフティガン湖の北を迂回するコース上に [ibid., p. 298]. Marwaṣt は Harat の北に位置する町である [Krawulsky 1978, p. 198, karte 6].

⑤ イル・ハーン朝期、ヤズドは絹織業で有名であり、国際市場に向けて輸出を行う手工業の中心都市の一つに数えられた [Petrushevsky, I.P., "The Socio-Economic Condition of Iran under the Il-Khan", *The Cambridge History of Iran*, vol. 5, Cambridge, 1968, p. 506]. また、ヤズドではカナーツを利用した農業が行われていたが、住民にとって十分な穀物の生産には至らず、周辺地域から輸入する必要がある [MQ: 74].

⑥ 管見の限り、史料の中で確認できる Muzaffar とヤズドの都市住民

との交流を伝える記述は、当時ヤズド地方で大きな影響力を持ったスーフィー Taqī al-Dīn Dādā Muḥammad (一三〇一年没) に関するものだけである。Taqī al-Dīn Dādā は、イスファハーン出身で、メイボドを中心にヤズド地方全域にハーンカーを建設して大きな影響力を持ったスーフィーであった [Afshar, I., *Yadgar-ha-yi Yazd*, vol. 1, Tehran, 1348s, pp. 126-128; idem., *Yadgar-ha-yi Yazd*, vol. 2, Tehran, 1354s (タヘ Afshar vol. 2 の附記), pp. 350-352; Lambton,

A.K.S., *Continuity and Change in Medieval Persia*, Albany, N.Y., 1988, p. 324]。彼は、当時ヤズドのアクベクに仕えていた Muzaffar が見た夢の解釈を行い、Muzaffar に対して彼の子孫がヤズド地方を統治するようにになると告げたという [HS: 273; RS: 448]。しかしながら、この記述が見出せるのは、ティムール朝後期に書かれた史料のみである。

第二章 Mubārīz al-Dīn と都市の有力者

一三三五年の Abu Sa'īd の死後、Mubārīz al-Dīn はチヨバン朝との同盟を通じて一三四〇年ケルマーン地方の支配権を授与され、ケルマーン征服後は国都 (dar al-mulk) をこの地に移した。

Abu Sa'īd の死からシーラーズ征服に至る王朝の拡大期は、ムザッファル朝下で鑄造された貨幣に刻まれた支配者の名前が様々な変遷を経た時期でもあった。当初、貨幣には傀儡ハーンの名前が刻まれていたが、やがて講和を通じて一時その宗主権を認めたインジュール朝 Abu Ishāq Lājī の名前が刻まれ、この段階では最終的に一三五一―二年に支配者の名前のない貨幣が鑄造されるようになった。^① よって、Mubārīz al-Dīn はこの時期、政治的には同盟関係を通じて承認していた傀儡ハーンや Abu Ishāq の宗主権から脱し、徐々に自身の支配権を確立しつつあったと見做すことができるのである。そこで本章では、ヤズド、ケルマーンが王朝の中心地であった時代、Mubārīz al-Dīn はどのようにして自身の支配を正当化したのかという点について、主に支配領域の都市住民との関係から考察を進めていきたい。

一 ヤズドの有力者との関係

イランの都市社会においては、ウラマーやサイイドの名門家系が都市の有力者層を形成して住民全体の意志を決定する

立場にあり、しばしば住民代表として支配者との交渉を務めるなど「自立した」權威を保持していた。^②一方、権力者の側としては、イスラーム社会において支配的な地位を維持していくためには、支配の正統性をシャリーアによって保証されねばならず、そのためにシャリーアの管理者でありムスリム全体の合意を代表するウラマーの合意を取り付ける必要があった。^③イル・ハーン朝の權威を背景に成立したムザッファル朝にとっても、ヤズドにおいて支配權を確立するためには、当然彼ら有力者の協力が必要不可欠なものであったと考えられる。

ムザッファル朝成立当時のヤズドでは、ニザーム家と呼ばれるサイイド家系に属する Rukn al-Dīn Muḥammad (1331—1342) とその子 Shams al-Dīn Muḥammad (1342—1353) が、慈善施設の建設とそれらに対するワクフを通じて、都市行政において大きな影響力を行使していた。^④年代記、地方史とも、Mubārīz al-Dīn が、直接ニザーム親子と交流を持ったことを示す記述はないが、ニザーム家と血縁関係や経済的保護関係で結ばれた人々がムザッファル朝の支配と関わる活動をしていたことが確認できる。そこで、以下では Mubārīz al-Dīn がニザーム家と関わる人々とのような関係を築いたのかについて検証を進めたい。

年代記史料において最も多く言及されるヤズドの有力者の一人として、Mubārīz al-Dīn と Abu Ishāq Inju の間で繰り返した行われた講和交渉において計三回に亘って仲裁者を務めた Sayyid Sadr al-Dīn Mujtabā' が挙げられる。彼は、ニザーム家の Shams al-Dīn の妻の叔父にあたり、ニザーム家のワクフの一部に対して、男子の相続人がいない場合 mutawallī となるべき一人として規定されていた人物である。^⑤一三四—四年頃には、Mubārīz al-Dīn を中傷したために拘束された Khwāja Shams al-Dīn Sā'im Qadrī の助命を嘆願し、最終的に Mubārīz al-Dīn はこれを聞き入れて Khwāja Shams al-Dīn を赦した。^⑥ [Mī: 155; TAM: 49]。このことから、Mubārīz al-Dīn が、ヤズドの有力者である Sayyid Sadr al-Dīn の意見を尊重していたことが伺える。

また、Mubārīz al-Dīn 治世のヤズドでは、ニザーム家と婚姻関係や経済的保護関係を持つ人々が、政權から官職を与

えられて都市住民やサイイドの指導的立場にあったことが確認できる。まず、ナキープ (naqib)^⑧を務めたのは、ニザーム家の Shams al-Din の娘と結婚したサイイドの Mu'in al-Din Ashraf という人物であった [TY: 124]。次に、カーディーに任命されたのは、父方でヤズドの有力家系 Radī 家に繋がりが、ニザーム家の Rukn al-Din の娘、つまり Shams al-Din の姉妹を母に持つ Mawlanā Majd al-Din Hasan (1138-1166 年没) と、Shams al-Din の建設した Madrasa-yi Shamsiyya の教授 (mudarris) に任命されていたサイイドの Jamal al-Din Hasan Bukharī という二人であった [JKh: 515-516, 520; JM: 656; TJY: 134-136, 170; TY: 114-117]。

さらにニザーム家と関わりを持つ有力者の活動はヤズドだけに留まらなかった。一二三五一二年、Mubariz al-Din によってケルマーンにマスジデ・ジャーミとダールッスィヤーダ (dar al-siyada)^⑨の建設が始められたが、翌年のマスジデ・ジャーミの完成に際し^⑩、Mubariz al-Din の求めに応じて第一金曜日にフトバと札拝指導 (imamat) を行ったのが、Mawlanā 'Aḥf al-Din b. Taqr al-Din Muḥammad Ya'qub であつた [MJ: 209-211; TAM: 57-58]。彼は、ニザーム家の Shams al-Din によつて Jami'i Shamsiyya の mutawallī' imam' khatib 職に任命され、その他のワクフ物件でも男子の相続人がいない場合 mutawallī' に定められていた人物である [JKh: 484, 517]。

また、(Mubariz al-Din は) この二つの吉兆なる場所 (マスジデ・ジャーミとダールッスィヤーダ) の建物の経費 (ikhrāj) に、メイボドの相続財産の利益を充てた。一ディーナールもその他のいかなる地から加えることはなかった [TAM: 57-58] とあることから、ムザッファル朝王室の私有財産をワクフ財として寄進し、その収益でこの両施設の経費を賄ったことが明らかである。職員に対する給与もまたこのワクフから賄われたことは間違いない、'Aḥf al-Din は王朝から経済的保護を受けていたと考えることができる。

以上のように、ニザーム家と深い関わりを持つ人々は、Mubariz al-Din から敬意を受けるだけでなく、ナキープやカーディー職といった官職や宗教施設の職務就任を通じて、王朝から経済的保護を受けていたと見做すことができるので

ある。^⑮

本節の考察を通じて明らかとなった都市の有力者に対する Mubariz al-Dīn の対応は、他の都市や時代においても見られるような支配者の態度と同様である。つまり、Mubariz al-Dīn は経済的な保護や宗教施設の建築活動によってイル・ハーン朝期から影響力を持つヤズドの有力者と友好的な関係を築き、ムザッファル朝の支配に対する都市住民全体の支持を得ようとしたと考えられるのである。

二 ウラマーのファトワー

次に、都市の有力者が Mubariz al-Dīn の政策においてどのような役割を果たしたのかについて検証したい。その具体例は、ケルマーン地方で生活していた遊牧集団 Ūghaniyan と Jurmaiyan に対するウラマーら宗教関係者の行動の中に見出すことができる。そこで、まずムザッファル朝下におけるこの両部族の活動を確認した後、Mubariz al-Dīn の政策に対してウラマーがどのように関わったのかについて検証を進めたい。

Ūghaniyan と Jurmaiyan は、かつてイル・ハーン朝 Arghun がケルマーンのカラヒタイ朝^⑯の君主 Suyurghatmish の要請に応じてケルマーン地方警護のため派遣した守備軍であった [MT. ms. 140a; TAM: 70]。Mubariz al-Dīn はケルマーン地方を支配下に置いた後、大規模な戦闘の際には、この両部族を自軍に参加させるようになった。彼らはインジュール朝との抗争期を通じてムザッファル朝軍として貢献したが、その一方で度重なる反乱を起こしていた。

一三四七年、反乱を繰り返す両部族に対して Mubariz al-Dīn が攻撃をかけた Shahrayi Khawān の戦闘では、戦闘中馬を失った Mubariz al-Dīn は敵に囲まれ、からも窮地から逃れるほどの大敗であった [MT: 182-186; TAM: 53]。しかし Mubariz al-Dīn は最終的に両部族の罪を赦し、「一日に千もの栄誉の被服 (jama) をその部族に着させ、数々の心遣い

(nawazish) によって彼らの地位の階層をカペラ ('ayyug) にまで達せしめた。イクターと手当 (iqat wa marsumat) を定め、給与と俸給を支払う (imda'yi mawajib wa mugarrariyat) ように従うべき命令が発せられた」[MT: 197]。

やうに Mubariz al-Din はこの両部族との関係を強化するため、婚姻関係を築いた。Mubariz al-Din は、一三二八—九一年ケルマーンのカラヒタイ朝最後の君主 Quib al-Din Shah Jahan (在位一三〇一—一三〇五) の娘 Khan Qutluğh Makhdum Shah と結婚しているが [MT: 68-69, 76-80; TAM: 37-38]、彼女の母は Ughaniyan 出身であった [TAM: 70]。やうに、Khan Qutluğh から生まれた息子 Shah Shuja' は Ughaniyan のハミールの姉妹と結婚させ [TAM: 70]、自身も Ughaniyan の女性を妻に迎えているのである [MT: 175; MS: 209]。

しかし、度重なる恩赦や婚姻関係の締結によっても両部族の反乱が収まることはなく、Mubariz al-Din はウラマーから次のようなファトワーを得るに至る。

Ughaniyan は創造主 (khaliq) を持っていた。彼らはモンゴルの慣習に従い、それを崇拜し、その偶像 (butan) の前で捧げ物 (qurban) をこつた。Amir Mubariz al-Din はウラマー達のファトワーによって、彼らを不信心者であるとして非難し (takfir-i tshan hasil kardā) 彼らの戦闘を聖戦 (ghaza) と見做していた。これにより、人々は彼 (Mubariz al-Din) を Shah Ghazi と呼んでいた。[TAM: 53]

同時代の詩人が Mubariz al-Din のことを Shah Ghazi と呼んだことも、この記述の事実を裏付けるものであろう。^⑩

一方で Mubariz al-Din は、一三五一年ケルマーンに侵攻してきたインジュ朝軍との対決を前に、Ughaniyan と Jurnaiyan に協力を要請した。両者の間で、これまでの対立を忘れて協力を確認する旨の取り決めがなされ、その内容はカーディー達の登記を備えた誓約書 ('and-nama-ha-yi mashqun bi-sijl-i qudat) として発行されたという [MT: 226-227]。こつた Mubariz al-Din による行動は、前述の Shah Ghazi としての立場と明らかに矛盾するものであったが、最終的に両部族の参加によつて Panj Angusht におけるインジュ朝軍との戦闘に勝利することができたのであった。

以上のように、ケルマーン地方を支配下に治めるようになったこの時期、Shah Ghazrとして不信心者たる Ūghaniyan と Jurnaiyan に対して聖戦を行う一方、大規模な対外戦略においては彼らを戦力から外すことはできないという矛盾が、Mubarriz al-Dīn には常に付きまとっていたのである。そして、そこにはウラマー層が Mubarriz al-Dīn の政策において重要な役割を果たしていたと見做すことができるだろう。ここで述べられているウラマーやカーディーがどういった人物であったかについては、残念ながら史料には記述がない。しかし、少なくとも彼らのように公職に就いていた宗教関係者が、支配者たる Mubarriz al-Dīn の意向に沿う形で、時にファトワーを発し、時に和解の証人として振る舞い、Mubarriz al-Dīn の軍事活動を正当化する役割を果たしていたことが明らかとなるのである。

ここで本章全体をまとめておきたい。父 Muzaffar が都市住民と交わることも無く、イル・ハーンとの繋がりを背景にヤズド地方で軍事的な権力を掌握したのとは対照的に、Mubarriz al-Dīn は都市の有力者を官職や宗教施設の職務に任命することによって経済的に保護する一方、ウラマーやカーディーなど宗教関係者の側も明確にムザッファル朝の支配を正当化する役割を果たすようになった。こうして Mubarriz al-Dīn は、徐々に自身の支配に対する都市住民の支持を獲得し、当初同盟を通じて宗主権を認めていた傀儡ハーンや Abu Ishaq Inju の名を貨幣から削除するに至ったと考えられる。しかし、まだこの時点では、Mubarriz al-Dīn が自身の名でフトバとスイッカの権利を行使することはなかった。そのためには、さらに Mubarriz al-Dīn の支配者としての権威を確立する根拠となるものが必要だったのである。

① 「はじめに」注二三参照。

② イランにおける都市の有力者層は何代も続く名家によって形成されていた。このような都市の名家層の研究として、イスファハーンに関しては Quiring-Zoebe, R., *Isfahan in 15. und 16. Jahrhundert*, Freiburg, 1980; 羽田正「フザーニー家の人々——東方イスラム世界における一家の歴史——」、『史学雑誌』九六一—(一九八七)、シーラーズに関しては Limbert 2004, pp. 74-141 などがある。その

他、イラン都市の有力者層に関する研究については、羽田正「イラン」羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究——歴史と展望——』、東京大学出版会(一九九二)、二二六—二四一を参照のこと。

③ 嶋田義平「イスラームの国家と社会」、岩波書店(一九七七)、二七三—二七四頁。

④ ニザーム家の系譜及びこの家系を中心とするヤズドのサイイドの活動については Afshar vol. 2, pp. 298-305; Aubin, J., "Le Patron-

- age Culturel en Iran sous les Ilkhans. Une Grande Famille de Yazd', *Le Monde Iranien et l'Islam*, 3, 1975, pp. 108-113 (参照⑤)。
イル・ハーン朝末期にニザーム家の親子が作成したワクフ文書については、岩武昭男「ニザーム家のワクフと十四世紀のヤズド」『史料』七二三(一九八九)によって全体の構成が明らかにされている。
- ⑤ 一度目は、一三四五十六年頃ムザッファル朝の代表としてインジュ朝側の代表である Abarguh のハーキムとの間で交渉を行く [MT: 186]。続く一三四十七年頃 Abu Ishag Inja がヤズドを一時征服した後、メイギルと Mubariz al-Din の長男 Shah Muzaffar (一三三四一五一一三五年) との間で講和を結び、際に仲裁役を果たした [MT: 193; T4M: 55]。その二度目の講和の直後、Abu Ishag Inja の指示でケルブーンと Mubariz al-Din の許に派遣されて講和交渉を行なった [MT: 193-194; T4M: 55]。
- ⑥ ワクフ文書作成時 Shams al-Din には息子がいなかったため、男子が生まれない場合を想定して女子の相続を規定しており、その場合の mutawallih を細かく設定している [岩武(一九八九)、四三頁(注三四)]。Abarguh のハーンカーにつづて書かれたワクフ文書の箇所には、彼は「男子がなければ Shams al-Din の娘と姉妹、そして Sadr al-Din Mujibati が共同で mutawallih に就く」とが定められている [Kh: 520-521]。
- ⑦ 彼は「当初チヨバン朝の Malik Ashraf にワズイルとして仕え、Mubariz al-Din に対する中傷を行なった。一三四三四年頃 Malik Ashraf からの援軍要請に対し、Mubariz al-Din は Shams al-Din を引き渡すことを交換条件として提示した。つづいて Shams al-Din は拘束されるが、後に助命されてムザッファル朝に仕えた。やがてインジュ朝に寝返って Abu Ishag のワズイルとなり、一三四五年税徴収のためインジュ朝軍を率いてホルムズに遠征を行った。」
- その後ケルマーンに進軍してムザッファル朝軍と戦ったが、敗死した [DW: 240-242; MF: 70-71; MT: 145, 154-157, 161-165; T4M: 48-51; Chant 1321, pp. 82-83; Sutuda vol. 1, p. 76, pp. 79-80]。
- ⑧ ナキーンは、通常特定の都市と地方のサイイドに対して権限を持ち、その地のサイイドの中でも有力な人物がその職に就いた。その職務は系譜の統制、社会生活の監督、サイイドに対する裁判権、サイイドを受益者としたワクフの運営の管理といったものである [森本一夫「サイイド系譜学の成立(一〇一世紀)——系譜統制との関わりを中心に——」『史学雑誌』一〇五七(一九九六)九一一頁、同「サイイドとシャリーフ——ムハンマドの一族とその血統——」『岩波講座世界歴史一〇イスラーム世界の発展』岩波書店(一九九六)三〇五—三二三頁]。
- ⑨ 彼の息子 Rukn al-Din Shah Hasan は、後に Shah Shujā' のワズイルとなった [DW: 250-252; JM: 560; T4M: 98; TTY: 116]。
- ⑩ Radī 家は、学問修行のためヤズドに赴いた岩武日の Rashid al-Din Fadl-allah を保護したこともある名門家系で、後ワズイルとなった Rashid al-Din は彼らのためにヤズドで複数の宗教施設を建設した [Alshar, I., "Rashid al-Din wa Yazd", *Majma'at al-khatibah-yi taqayyat dar-dar-yi Rashid al-Din Fadl-allah*, Tehran, 1350s, pp. 26-27]。
- ⑪ ニザーム家のワクフ文書の中で Majid al-Din 自身の名前は見出さないが、彼の兄 Sharaf al-Din 'Alī (一三五三—一四四年没) は、多くの物件に対する監査人 (mushrif) に定められ、重要な役割を与えられている [Kh: 412, 431, 444, 521]。なお、十七世紀に書かれたヤズド地方史におおむね、当時彼の家系が存続していたことが確認できる [JM: 656]。
- ⑫ ダールッスィヤードは Ghazan 以降イル・ハーン朝領域各地に建設が進められた施設であり、その基本的な機能は貧しいサイイドやサイ

- イドの旅人を対象とした慈善・宿泊施設であった」[岩武昭男「ガザン・ハンのダールッスイヤーダ (dar al-siyada)」『東洋史研究』五〇一四 (一九九二)]。
- ⑬ *MF* によれば、マスジデ・ジャミシとダールッスイヤーダの完成年は、それぞれ一三五二―三年、一三五四―五年であった [*MF*: 79-80]。
- ⑭ 彼の父 Taqr al-Din Muhammad b. Abi Bakr b. Ya'qub はヤズムの dar al-qur'an b. 'クルアーンの師 (ustad-i qur'an)』を務め、ヒサーム家の Rukn al-Din の「クルアーンの師」でもあった [*TY*: 108-109, 158; *TFY*: 177; 岩武 (一九八九) 二九頁]。
- ⑮ サファヴィー朝下のマシユハドにおいても、官職や宗教施設の職務就任を通じて有力者を経済的に保護し、王朝に対する支持を高めようとした例が見られた[守川知子「サファヴィー朝支配下のマシユハド——十六世紀イランにおけるシーア派都市の変容——」『史林』八〇―二 (一九九七)]。
- ⑯ ケルマーンのカラヒタイ朝は、元々中央アジアのカラヒタイ朝の家臣の一人で、後にホラズム・シャー朝に仕えた Barak Hajib (在位一二三二―三三) を創始者とする。彼は、モンゴルの侵入による混乱を利用して、一二三二年ケルマーンに進出。モンゴル政権に使者を派遣して恭順を表明し、ケルマーンの支配権を承認された。以降、彼の家系はモンゴル支配者層との婚姻を通じて関係を強化し、一三〇五年に Shah Jahan が Oljeytu にまつて廃位されるまで、ケルマーンの統治を維持するのに成功した [Iqbal 1341, pp. 403-410; Lambton 1988, p. 15, pp. 276-287; Lane, G., *Early Mongol Rule in Thirteenth-century Iran*, London & New York, 2003, pp. 96-122; 'KIRMAN', 'QUTLUGH KHANDS', *ETJ*°]。
- ⑰ ケルマーンのカラヒタイ朝史には、このモンゴル守備軍に関して「その年 (一二八四―五年) ヤルリグによってケルマーンに来ていた Ughan を指揮官 (bashiab) とするモンゴル軍 (chang-i mughul) の一団であり、今日 (一二一五―一六年頃) に至るまで彼らの不正 (fasad) によってケルマーンの暖地帯と寒冷地帯 (jurm wa sarud) は動揺した」という記述がある [Nasir al-Din Munsht Kirmani, *Simt al-Ula li-Haqiqat al-Ula dar Tarih-i Qaza Khia'yun-i Kirman*, ed. 'Abbas Iqbal, Tehran, 1328s: 58]。同じ記述がされる指揮官 Ughan とは、ジャライル部族出身の千人隊長であった[北川誠一「イル＝ハーンとニクーターリヤーン」、『イスラム世界』一八 (一九八二)、六頁; 志茂碩敏「モンゴル帝国史研究序説——イル汗国の中核部族——」、『東京大学出版 (一九九五) 一七八頁]。また Lambton によれば、*Tarih-i Wazir* には、一二七八―九年 Niguderian と呼ばれる遊牧集団が Kurbal で略奪を行った際、Jurm とする名のモンゴル人の息子や娘が奴隷にされたという記述がある [Lambton, A.K.S., "Mongol Fiscal Administration in Persia", *Studia Islamica*, 64, 1986, p. 83]。以上のことから、ジャライル部の Ughan に率いられたケルマーン守備軍の構成員がやがて Ughanyan と呼ばれるようになり、その軍には Jurma を名祖とし Kurbal で生活していた別のモンゴル部族 Jumai'yan も参加していたと考えられる。
- ⑱ このウラマーのファトワーに関しては、*MS* にもほぼ同じ記述があるが、その中に「Amir Ghazi」や「MS: 219」。
- ⑲ Hafiz va Khwaj-i Kirman' 'Ubayd Zakani とする人物は、自身の書に Mubarriz al-Din Sarud Shah Ghazi' Khusrav Ghazi と記述がある [Ghani 1321, p. 90, 179]°。

第三章 カイロのアッバース朝カリフへのバイア

前章で述べたように、都市住民との関わりを深めることによってヤズドとケルマーンにおける支配の基盤を築いた Mubarriz al-Dīn は、一三五三年インジュ朝の中心地であるシーラーズに向けて出発し、その年のうちにシーラーズの征服に成功する。さらに、シーラーズ陥落直前に逃亡した Abu Ishāq Inju を追ってイスファハーンに遠征し、その途上一三五四年イスファハーン近郊の Marwanan においてカイロのアッバース朝カリフ al-Mu'addid bi-Jah Abī Bakr (在位一三五二—一三六二) の代理人 (wakīl) に対してバイアを行った。^②

これまで、カイロのアッバース朝カリフに対するバイアという行為は、Muzaffar の時代も含めムザッファル朝治下で行われたことがないばかりか、イル・ハーン朝期以来イランの地で一度も行われたことはなかった。

また当時のイランでは、傀儡ハーンを擁立したモンゴル系有力アミールが自ら「スルタン」の称号を用いることはなかったが、^③「イラン系」地方政権の支配者の中には、一三四四年自らの名でフトバとスィッカの権利を行使した Abu Ishāq Inju のように [MT: 157; TAM: 50] カリフに対してバイアを行うことなく「スルタン」を自称する者がいた。^④これに対し、Mubarriz al-Dīn は一三五二—一三五年以降支配者の名前のない貨幣を鑄造していたが、このバイアを行った後、カリフの名と共に「スルタン」として自身の名でフトバとスィッカの権利を行使し、支配者としての自身の立場を明確に主張するようになったのである。

以上のことから、この行為にこそ Mubarriz al-Dīn の支配の正統性を探る上で重要な鍵が隠されていることは間違いない。そこでこの章では、Mubarriz al-Dīn によって行われたカイロのアッバース朝カリフに対するバイアの目的を明らかにし、バイアの後 Mubarriz al-Dīn が主張した支配の正統性とはどのようなものであったのかについて検証を進めていきたい。

まず、Mubariz al-Dīn がバイアを行った経緯を MS の記述から確認し、この行為の目的を探ってみたい。

勇者たる陛下 (Janab-i Mubariz=Mubariz al-Dīn) においては目的を達成する崇高な志 (himmat-i 'alr-yi nahmat) が、ヤズドとケルマーンとファールスの国々の支配に満足することはなかった。それどころかイラクとアゼルバイジャンを征服する考えが彼の心の中にあつた。支配の基礎を確かなものにしようと望み、アッバース朝カリフにバイアを行うという考えが彼の心を占めた。そのため使者をカイロ (misr) に送った。[MS: 276]

以上の記述から、シーラーズを征服し、新たにファールス地方を支配領域に組み入れた Mubariz al-Dīn は、続いて行うこととなるイスファハーンとタブリーズへの遠征の前に、自身の支配権を確立しようと考えたことが明らかとなった。では、なぜシーラーズ遠征前ではなく、この時期に「支配の基礎を確かなもの」にする必要があつたのだろうか。

シーラーズ征服の結果、Mubariz al-Dīn が新たに支配領域に加えたファールス地方は、これまで Abu Isḥāq の名においてフトバが読まれ、貨幣が鑄造されていた地域であつた。Mubariz al-Dīn はさらなる軍事遠征を行うにあたって、このファールス地方において Abu Isḥāq に代わる新たな支配者として自身の立場を明確にする必要があつたと考えられる。実際、征服直後のシーラーズでは、Abu Isḥāq 配下のアミールと親インジュ朝派の市民が結託した大規模な暴動が発生し、一時シーラーズが奪還されるといふ事件が起つており [MI ms.: 120b-127a; TAM: 65-66]、ファールス地方の安定は急務であつた。

一方で Mubariz al-Dīn は、シーラーズ征服後も名門家系出身である Qāḍī Majd al-Dīn Ismā'īl (一三五五年没) に引き続きファールス地方の大カーデー職を委ねており、ヤズドやケルマーンにおけるのと同様に、従来からの都市の有力者、特に名門家系出身者を優遇していた。シーラーズでの暴動において名門家系の有力者が関与したという事実が見当たらないことも、そのことを裏付けるものであろう。しかし、これまでムザッファル朝支配領域において例のない都市住民による暴動の勃発は、都市の有力者を優遇することで支配の正統性を得ていた従来の政策だけでは、ファールス地方の安定が

得られなかったことを表している。こうした状況下で選択されたのが、カイロのアッバース朝カリフへのバイアという手続きを通じて「スルタン」の称号を得ることであり、それによって自身の支配に対する正統性を確立しようとしたと考えられるのである。

しかし、この時までにカイロのアッバース朝カリフに対してバイアを行っていたことが確認できるのは、カリフの保護者たるマムルーク朝やアラビア半島のアラブ遊牧諸部族は別として、インド、マグリブ諸島といったいわばイスラーム世界周辺部の支配者のみであった^⑦。イル・ハーン朝以来、カイロのアッバース朝カリフの権威そのものが顧みられることのなかったイランにおいて、このバイアは如何なる意味を持っていたのであろうか。次にMのバイアに関する記述を確認しよう。

Marwananの村に下馬したとき、(Mubarriz al-Dinは)長い間正当なカリフ (khalifa-yi haqq) にバイアをするために吉兆なるお心に抱かれていた意図を、実行に移すことを輝くお心にお決めになった。そして祖先の委託と子孫のバイアに従い (bi-hukm-i tatariz-i salat wa bay'at-i khalaf)、美德あるカリフ位の敷居と天空のごとく壮麗な謁見の間に「いる」信徒の長、両世界の所有者たる使徒の叔父の子孫である堅固なるカリフ al-Mu'tadid bi-llah Abi Bakr al-'Abbasi——神が彼のカリフ権を永続せしめ、彼の地位を高め、彼の証拠と証を両世界に明らかにし給わんことを——の代理人にバイアをなされた。かの陛下 (＝ al-Mu'tadid bi-llah) の代表統治職と代理職 (niyabat wa qaim-maqam) のしるしをスルタン位の衣服の飾りとした。七五五年 (一二三四—五年)、モンゴル軍の襲来の時から今日までアッバース朝カリフの名を唱えるという飾りが為されないうままであったイスラームのフトバは、Mu'tadidの神聖なるラカブを唱えるという榮譽を与えられた。預言者 [中略] の数々の奇跡の驚異の一つである「神はこのウスマに一〇〇年毎に信仰を新たにする指導者をお送り給う」^⑧ というハディースに従い、日付に注意してみると (chun ihtiyat-i tartkh raft)、カリフの高貴なるお名前が終焉した始めから (az mabda' tary-yi asami-yi sharfi-i khulafa) イスラームのシンボルがカリフの吉兆なるラカブ「を唱える」という称賛されるべき帰還を保障されたことによつて (bi-mazmun al-'awdi-

al-mad-i-manabir-i-Islam bi-al-qab-i-humayun-i-khalifa) 地上が高貴なものとなった時まで、ちょうど一〇〇年である「中略」。王国のスイッカは時のカリフの偉大なるお名前前で飾られ、勇者たるスルタン (Sulṭān-yi Mubārīz) の高貴なるラカブが代表統治職の儀礼に従い、フトバとスイッカにおいてカリフの名に続くもの (tal-yi nam-i-khalifa) とされた。[MI ms.: 133a-b]

以上のように、MIではバイアに関する記述の大半を使って、バグダードのアッバース朝終焉の年からバイアが行われた年までの一〇〇年を、ハディースで述べられている「一〇〇年」に結びつけることによって、バイアという行為を称賛することに集中しているのである。ここで重視されているのは、カイロのアッバース朝カリフの権威が正当なものか否かという問題ではなく、モンゴルの襲撃以降アッバース朝カリフの名でフトバとスイッカの権利が行使されることがなかったという事実であり、それがMubārīz al-Dīnによつて復興されたという点なのである。

さらに、MIの序文ではMubārīz al-Dīnに対し、「信徒の長の援助者 (nasir amir al-mu'minīn)」[al-Mu'tadidのカリフ位を固める人 (muwattīd al-khilāfa)] のようにアッバース朝カリフに関連した内容と並んで、「穢れなきシャリーアの慣習の革新者 (mujaddid marāsim al-shar'at al-gharā')」[第七の世紀を約束された者 (maw'ud al-mī'at al-sabi'a)] というラカブが挙げられている [MI: 11]。こうした記述からは、バイアという行為をハディースと結びつけることによって、Mubārīz al-Dīnが神によつて一〇〇年毎に遣わされる「信仰を新たにする指導者」の一人であり、その「七番目の指導者」であることを主張しようとする意図が読み取れるのである^⑧。

しかし、セルジューク朝以来、スルタンがカリフから委任されたのは世俗の権限に限定されたものであり、本来その職務に宗教的権限は存在しなかった。さらに、MIで引用されているハディースについては、第一の世紀にカリフ 'Umar、第二の世紀に Shahrīf、第三の世紀に Ash'arī が、それぞれ神によつて遣わされた「信仰を新たにする指導者」であるという解釈が存在していた^⑨。MIの著者である Mu'm al-Dīn Yazdī (一三八七年没) は、若き日に著名なシャーフィイー派法学

者でありアシユアリー派神学者であった‘Aduḍ al-Dīn al-Īrī^⑩（一二五五年没）の許で学び、自身ハディース学に秀でた学者であったことから、当然上記のような解釈があることは知っていたと考えられる。では、カリフや著名なウラマーに比する人物としてMubārīz al-Dīnを賛美するMIの記述は、どのような意味を持っているのであろうか。

その答えは、バイアの後に行われたMubārīz al-Dīnの行動の一つに、見出すことが出来る。すなわち、一二五八年タブリーズ征服に成功したMubārīz al-Dīnは、その地のマスジドで自ら説教壇（minbar）に登り、カリフ al-Mu‘tadīdの名でフトバを読み、礼拝指導を行ったのである [DhMA: 318; MS: 300; TAM: 78]。Abu Bakr以降、アッバース朝時代初期に至るまでのカリフは自らフトバを行っていたものの、それ以降通常フトバは専門の説教師（khaṭīb）が行うべきものであった^⑪。実際、第二章で確認したように、Mubārīz al-Dīnは、ケルマーンのマスジドでは‘Aḥī al-Dīnに対してフトバと礼拝指導を行うよう命じている。それに対し、タブリーズではその地の有力者でもムザッファル朝支配領域のウラマーでもなく、自らフトバと礼拝指導を行うという本来カリフに属する権限をも行使したのである。

以上のことから、MIのバイアに関する記述は、Mubārīz al-Dīnがカイロのアッバース朝カリフに対してバイアを行った後、世俗の君主「スルタン」としての立場だけでなく、カリフの持つ宗教的権威をも主張するようになったことを示していると考えられるのである^⑫。

さらに、かつてイル・ハーン朝の国都であったタブリーズでのMubārīz al-Dīnによるフトバは、イランにおける支配者の権威に關して、もう一つ重要な意味を持っていた。タブリーズやスルターンニヤを中心とする西北イランは、イル・ハーン朝期を通じてモンゴル支配者層が居住する直接支配地であり、Abu Sa‘īd死後もモンゴル支配の影響を色濃く残していた地域であった^⑬。その西北イランにおいてMubārīz al-Dīnが新たな支配者として自ら行ったフトバは、Chingiz Khanの後裔のみが支配者たりうるといふ概念がイランの地から完全に払拭されたことを示す象徴的な出来事であったといえるのである^⑭。

- ① 一二六一年マムルーク朝 Baybars にてカイロのアッバース朝カリフ擁立の経緯については Ayalon, D., "Studies on the Transfer of the 'Abbasid Caliphate from Baghdad to Cairo", *Archica*, 7, 1960; Holt, P. M., "Some Observations on the 'Abbasid Caliphate of Cairo", *BSOAS*, 57, 1984 を参照された。
- ② バイアとは、元々商取引が成立したときに行われるアラブの古い習慣であったが、後にカリフの即位、あるいはカリフやスルタンの権威を承認する際に行われる儀式となった。バイアとは主権者への服従を条件とする契約であり、それは自らの手を主権者の手に重ねるという形で実行された【佐藤 (二〇〇四) 一七、一五五—一五六頁: "BAY'Ā", *ELZ*】。この場合、バイアによつてカイロのアッバース朝カリフの権威に服従することを表明し、「スルタン」の称号と自身が統治する領域に対する支配権を授与されることを意味する。
- ③ ジャライル朝の Shaykh Hasan Buzurg は、一二四〇年傀儡ハーンの Jahan Temur を廃位し、自ら権力を握つた後も、自身は「ウルス・ベン」の称号しか用いなかつた【Roemer 1986, p. 5; "JALĀYIR", *ELZ*】。彼が息子 Shaykh Uways に献呈されたジャライル朝の公式年代記である *TSHU* では、Shaykh Uways に「スルタン」の称号を付してゐるのに対し【*TSHU*: 180】、Shaykh Hasan Buzurg はこの称号は常に「ベン

- ④ Abu Sa'id 死後のイランにおつて Chingiz Khan の血統を持たない支配者のうち、「スルタン」として自身の名を貨幣に刻んだのは、Abu Isāq Injū が最初の例であつた【Album 1974, p. 159】。その後一三四五—一六年にはクルト朝の Mu'izz al-Dīn や「スルタン」の称号を付して自身の名を貨幣に刻み、一三四九年に公式に「スルタン」位就任宣言を発した【Potter 1992, p. 50-51】。
- ⑤ シーラーズ市民による蜂起は、地区別にインジュ朝派、ムザッファル朝派に分かれて展開された。Mubarriz al-Dīn によるシーラーズ征服の際、内通して城門を開じた Kulu 'Umar が属する Murdistān 地区はムザッファル朝を支持し、Mubarriz al-Dīn によつて殺害された Kulu Fakhr al-Dīn の属する Kazarun 門地区はインジュ朝を支持した。Kazarun 門地区の人々が、インジュ朝のアミールと Shalistan 軍を市内に引き入れたため、街は混乱状態に陥つた。最終的に Shah Shuja' によつて暴動は鎮圧された【Chant 1921, pp. 106-107; Limbert 2004, p. 37, 101】。
- ⑥ 祖父の代から一五〇年間、シーラーズの大カーデー職の地位を世襲している有力家系出身。彼の家系及びイル・ハーン朝からインジュ朝期における支配者との関係については【LB 2: 319-326; *MTM*: 176; *SHN*: 172-173; 密武 (一九九一) 五三三頁; Limbert 2004, pp. 125-130; Sutuda vol. 2, pp. 283-285】。彼は、一三五四年シーラーズになつて Shah Shuja' と Kashan のサイイド家系出身の女性との婚姻契約に立会つており【*MTI* ms.: 144b】。ムザッファル朝によつて支配者と関わつてゐたことが窺える。
- ⑦ cf. *IB* 5: 76-77; 家島孝一「マムルーク朝の対外貿易政策の諸相

——セイロン王 Bhuvanaikabāhu とマムルーク朝スルタン al-Mansur との通商関係をめぐって——」『アジア・アフリカ言語文化研究』二〇、東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所（一九八〇）、八一—八三頁。

⑧ Abu Dawūd の *Suman* にあるハディース。

⑨ ヤズドの地方史にも、Mubariz al-Dīn が人々から「第七の世紀を約束された者」と呼ばれたことを伝える記述がある [TZY: 86; TY: 53]。また Mubariz al-Dīn の主馬頭 (Amr-akhur) やあひだ Mahmūd (TZY ㄲ ㄲ Muhammad) b. Qasim Amr-akhur が建設したペトラサの入り口の上部には、このラカフが書かれていたという [TY: 125]。

⑩ 井筒俊彦『イスラーム思想史』中央公論社（一九九一）、六七頁。

⑪ Shabankara の「出身の著名なウラマー。イル・ハーン朝期 Abu Sa'īd からスルターニヤに招かれ、qaṣr al-mamlūk に任命された。Abu Ishāq Injī 支配下のシーラーズでも影響力を持ち、Mubariz al-Dīn によるシーラーズ遠征時にインジュ朝の代表として講和交渉を行ったが、失敗。シーラーズ陥落直前に脱出」。一時ムザッファル朝に仕えた [HS: 221; MT: 192-193, 241-247; TAM: 60, 144 (awḥāt 47); Saitō vol. 2, pp. 285-287; "al-Jī", E/2]。

⑫ 岩武（一九九八）、八四頁；Hartmann, A., "Eine orthodoxe Polemik gegen Philosophen und Freidenker—eine zeitgenössische Schrift gegen Ḥaṭīz—Mu'īn al-Dīn Yazdī und sein "Targama-yi

raṣī an-nasā'ih", *Der Islam*, 56, 1979, pp. 276-277。

⑬ 佐藤（二〇〇四）、一五九—一六〇頁。

⑭ この点に関しては、*MT* の中で常に Mubariz al-Dīn を指して用いられる「カリフ位の避難所たる陛下 (Ḥadhar-i Khilāfat-panah)」という呼称にも表れていると言えよう [MT: 19ff.]。通例「ヘルシヤ語である人物を修飾する時に用いられる「一の避難所 (—panah)」という表現は、「一」にあたる名詞がその人物の所有下にある、または資質乃至職務としてその人物に備わっていることを指す。よってこの場合、Mubariz al-Dīn が「カリフ位、カリフ権」を有する人物であることを表現していると考えられるのである。その他の史料でも、Mubariz al-Dīn を「時のカリフ (ḫalīfa-yi 'ahd)」[SM: 122] と称するものや、バイヤの後 Mubariz al-Dīn が「カリフ位とスルタン位に座した」[DhMA: 316] といった *dhāt* Mubariz al-Dīn をカリフと同一視する記述を見出すことができる。

⑮ 本田実信「イルハンの冬営地・夏営地」『モンゴル時代史研究』、東京大学出版（一九九九）、二七九—三八〇頁。

⑯ 一三五八以降タブリーズを支配したジャラール朝 Shaykh Uwais は、一三五六—七七年の時点ではアゼルバイジャン地方に侵攻してきた金帳ハーン Jani Beg の名で貨幣を鑄造していたが、一三六一年以降に鑄造された貨幣では「スルタン」として自らの名を刻んでいる [cf. Alburn 1974, p. 159; Bayant 1345, pp. 241-252]。

おわりに

イル・ハーン Abu Sa'īd 死後の混乱期において、Mubariz al-Dīn はヤズドの有力者と友好的な関係を築き、ケルマー

ン地方征服以降は、ウラマーの側も積極的にMubarriz al-Dīnの支配を正当化することになった。こうして都市住民から支配に対する支持を獲得したMubarriz al-Dīnは、傀儡ハーンやAbu Ishāq Injuの宗主権から脱したと考えられるが、未だ自身の名でフトバとスイッカの権利を行使するには至らなかった。やがて、シーラーズ征服後には、さらなる軍事遠征を展開するため、新たに支配下に治めた地域において、支配者としての立場を明確にする必要に迫られた。そこで選択されたのがカイロのアッバース朝カリフに対するバイアという行為であり、その後「スルタン」の地位と宗教的指導者としての権威を根拠とする支配の正統性を主張したのである。

こうしたMubarriz al-Dīnの政策と支配者としての権威の変遷は、領土拡大を続ける「イラン系」地方政権の君主が新たな支配領域において支配の正統性を確立するためには、都市の有力者との関係だけでは不十分であり、何らかの別の根拠が必要とされたことを表していると考えられる。一方で、Mubarriz al-Dīnが行ったカイロのアッバース朝カリフに対するバイアは、イランにおけるChingiz Khanの権威の失墜を象徴するものであり、新たに宗教的権威を持つ君主であることが支配の正統性を得る上で重要な要素になったことを示していると言えるだろう。^①

本稿で扱ったMubarriz al-Dīnが支配の正統性を確立する過程は、イル・ハーン朝崩壊後の地方政権の中でも特異な例かもしれない。しかし、Mubarriz al-Dīnの跡を継いだShah Shujā'が後に後継者に選んだのは、サイイドの女性との間に生まれた息子Zayn al-'Abidin^②（在位一三八〇～三七）であった。史料からは、Zayn al-'Abidinが君主として十分な政治的能力を有していなかったことが窺えるため、Shah Shujā'が自身の息子達の中からZayn al-'Abidinを後継者に指名した要因は、彼の持つサイイドの血統によるものであったことは明らかである。この後継者選択は、当時のイランにおけるサイイド崇拜の高まりだけでなく、かつてMubarriz al-Dīnの主張した世俗権力と宗教的権威が結びついた君主像を反映していると言えるのではないだろうか。この点に関しては、自身サイイドであることを主張し、スーフィー教団の指導者でもあったサファヴィー朝君主の概念にも繋がる現象とも考えられるが、両者の間には相違点が数多く存在することまた

事実であり、その説明は今後の課題としたい。

本稿は、ムザッファル朝 Mubanz al-Dm の治世という限られた期間を対象としたものであり、今後さらにティムール朝やそれに続く王朝の変遷の中で、ウラマーを始めとする都市住民と王朝との関わりを明らかにすることによって、未だ不明な点が多い一四一―一五世紀のイランの政治的、宗教的状況を十分に理解することが出来ると考える次第である。

① ティムール朝初期の宮廷史家による年代記や外交書簡によれば、

Timur は中央アジアにおける軍事活動の時とは異なり、イラン遠征の際には Chingiz 家の権威を主張することなく、傀儡ハーンに「イスラームの帝王」を名乗らせることによって自身の軍事行動を正当化している [安藤 (一九九五) 二五九頁; Woods, J.W., "Timur's Genealogy", *Intellectual Studies on Islam. Essays written in Honor of Martin B. Dickson*, Salt Lake City, 1990, p. 105]。

② 彼は Shah Shuja' と Kashan のサイイド家系出身の Khatun-i 'Uzama' の間に生まれた [Jamal al-Dm Ahmad b. 'Alr al-Husayni, Ibn 'Inaba (or Ibn 'Utha), *Umda al-Talib fi Ansab Al Ahr Talib*,

Beirut, n.d.: 213; 岩武 (一九九二) 六八―七一頁]。Shah Shuja'

の死後、即位したが親族間の抗争に敗れ、ムザッファル朝最後の君主となる Shah Mansur (在位一三八八―一三九三) によって盲目とされた [TAM: 131; Sutnda vol. 1, p. 237]。ムザッファル朝崩壊後、Timur に助けられサマルカンドで余生を送った [MTM: 182; Sutnda vol. 1, p. 259]。

③ 例えば、彼は Shah Shuja' からイスファハーンのハーキム職を委ねられていたが、一三八二―三年頃「若さゆえの尊大さ」のために罷免されている [TAM: 108]。

The Legitimacy of the Rule of the Muẓaffarids :
Changes in Policy during the Reign of Mubārīz al-Dīn Muḥammad

by

SUGIYAMA Masaki

After the death of the last *de facto* Īl Khān, Abū Saʿīd, in 1335, influential Mongol amīrs seated descendants of Chingiz Khān as puppet rulers in a struggle for power. At first, local Iranian dynastic regimes, which had been established under the Īl Khānīd dynasty, recognized the authority of such puppet khāns, but later denied the authority of the Mongols. Although a large number of studies have been made on how regional Iranian regimes won support for their rule, little research has been devoted to the Muẓaffarids, one of the local regimes established during the Īl Khānīd period. Therefore, I wish to show in this study the process of the establishment of the legitimacy of the rule of Mubārīz al-Dīn Muḥammad, the founder of the dynasty.

Muẓaffar, the father of Mubārīz al-Dīn, served several of the Īl Khānīd rulers, and was conferred the post of overseeing the roads (*tutghāūl*) in Yazd district. After his father's death, Mubārīz al-Dīn inherited the post and was then given the title of governor of Yazd by Abū Saʿīd in 1318. Because the Muẓaffarids were descended from an Arab family who had migrated to Yazd during the Mongol invasion, they had no relations with the people of Yazd. It seems likely that without the support of the Īl Khān, Mubārīz al-Dīn could not have attained legitimacy to rule Yazd from the first.

After obtaining the right to rule in Yazd, Mubārīz al-Dīn actively started to develop relations with powerful figures in Yazd, especially a family of the Sayyids known as the Nizām, giving them economic support in the form of appointments to offices. Moreover, as Mubārīz al-Dīn conquered the Kirmān district, the 'ulamā came to play an important role when he made war or concluded peace with the nomadic tribes of Mongols in the district. In this way, we may say that he won the support of city dwellers for his own rule, but he made no effort to make outward display of his position as ruler at the time.

After Mubārīz al-Dīn captured Shīrāz in 1353, he had to establish the legitimacy of his rule over the newly gained Fārs district in order to further his military operations. Consequently, he chose to swear an oath of loyalty (*bay'a*) to the 'Abbāsīd

Caliph in Cairo. Thereafter, Mubārīz al-Dīn came to assert not only his status as secular ruler, Sultān, but the authority of a religious leader as well.

Judging from the changes policy during the reign of Mubārīz al-Dīn, it appears that both secular power and religious authority were required by a ruler in order to establish the legitimacy of rule in Iran where the authority of the Chingizid had rapidly faded.